市のまち 地名の由来

No.21

江戸時代、加藤氏が開発

加藤新田（付 儀兵衛新田）

本市の地図を広げてみると、行徳の埋立地に隣接して、「加藤新田」の名が見られます。面積は〇・一平方キロ。人口はわずかに四人で、面積の大半がゴルフ練習場と釣り堀で占められ、その他が工場地帯になっています。

「加藤新田」の名の起こりは、今から二百数十年前にさかのぼります。江戸横山町（現在の東京都中央区）の商人、升屋作兵衛（名字を許されて加藤氏を名乗った）が幕府から新田開発を請け負って、この地の埋め立て新田の造成を行いました。「加藤新田」の地名は、加藤氏が開発した新田ということからつけられたのです。

加藤新田の面積は、明和五年（一七六八）に七反一畝九歩（約七千百五十一平方メートル）と記録され、安永四年（一七七五）には海岸地域を「新塩浜」と称して塩田の経営が行われました。

明治二年（一八六九）の記録では、田畑が五町五反五畝十八歩（約五万五千五百九平方メートル）、塩浜が二町三反二畝余（約二万三千百七十四平方メートル）とあります。また、塩を焼く釜場が二棟、塩分の濃い海水を溜めておく土船（どぶね）が三カ所あり、これが明治十五年（一八八二）になると、塩浜の面積は三町五反九畝七歩（約三万六千三百七十平方メートル）と記録され、加藤新田での塩業は、明治のころまではまだ続けられていました。

行徳の海岸は、塩田の造成で沖へ沖へと拡張されていきました。今は地図上には載せられていませんが、加藤新田に隣接して「儀兵衛新田」というところがありました。これは、江戸神田（東京都千代田区）の儀兵衛が、寛保三年（一七四三）に開発した新田です。

昭和四十五年認可を得た、行徳南部土地区画整理組合の事業の結果、加藤新田の一部は幸一・二丁目に、四十六年認可の行徳中部土地区画整理組合の事業の結果、一部が宝一丁目、幸一丁目、塩焼三・五丁目に分離されました。「儀兵衛新田」は全域が分離されて、ついにその名称は消滅してしまいました。

このように、行徳には江戸時代、江戸の商人などによって開発された土地が広がっていたのです。

次回は「欠真間」を予定しています。

（社会教育指導員　綿貫喜郎）